

シ、俗ニ絮柳ト云フ、コ、ニ柳華一名柳絮ト云ハ非ナリ、花ハ黄色ナリ、紙ハ子ニ著テ生ズ、食物本草ニ、柳華初發時黃蘗是也、若其飛絮乃是華後所結之實矣ト云リ、

〔本草一家言〕^三楊柳。楊和名圓葉梁木、葉似桃葉、枝硬而楊起故名也、柳和名細葉梁木、葉如竹葉、枝弱而垂流故也、一種有軟條者名垂糸柳、一名蜀柳、一名御柳、和名下垂梁木、又有水柳、葉似楊葉、赤莖、故又名赤莖楊、一名蒲柳、和名河梁木、一名拘子柳、此物春初著花、茸毛銀白色、形頗如小狗子、故名、又有白楊、葉如棠梨而圓厚、背白、隨風動搖、古人所謂扶移是也、一種有紙手乃木似白楊而葉細尖背白、此白楊之細葉者、又有杞柳、一名柎柳、孟子曰以杞柳作栝椽是也、和名贅柳、和邦以製剔牙枝爲上好品、又有西河柳、非柳類、但以其態度相似而名、詳見于本條、又有熊梁木、莖青紫色、細膩光滑、葉似桑葉、及伊津幾葉、葉圓而長、初著花、成穗黃色、好事士挾瓶賞之、名爲豆柳、漢名未詳、玄隨錄

隨云楊柳一物雌雄之異耳、猶大連翹、小連翹、帶子海棠、軟條海棠之類是也、

〔筆のすさび〕^三一柳に數種ある事、予茶山が塾に柳三種あり、一は京の下河原に摘星樓とて、六

如上人の房の庭にありし柳の枝をさせるなり、もと絮綿多かりしが、水土によればにや、今はすくなし、二は蘇州府の種とて、長崎の徳見茂四郎より送り來る、一は蜀柳とて、荒木爲五郎より得たり、此柳は西洞院風月入道殿、主上より賜はりしをわかつて平松宗致に給ふ、宗致備中松山人ゆゑ、故郷へもわから植ゑたるなりといふ、荒木は松山人なり、予と善し、蜀柳は近頃枯れたり

〔古今著聞集〕^{草十九}二品、時賢卿の綾小路壬生の家に、鞠のかゝりに、柳三本有けり、其内戊亥のすみ

の木に、鳥すをくひ侍けるを、いがか、おもひけん、其からす其すをはこびて、むかひの桃の木につく、あててけり、人々あやしみあへりけるほどに、一兩日を経て、關白殿より柳をめされたりけり、二品、其時他所にいられたりける程成ければ、御つかひにむかつて、御教書を付たりければ、すみやかにむかひて、いづれにてもはからひてほりて參るべきよしひければ、御つかひ、かのていに